

1. はじめに

一般的には養鶏及び養鶉では病気を予防するために抗生物質、殺菌剤の投与やワクチン接種は欠かすことができない。しかし、静岡県湖西市に位置する浜名湖ファームでは抗生物質や殺菌剤、ワクチンを使用しない飼育方法で良質な鶉卵の生産を行っている。また、鶉の糞尿を原料とした有機肥料の生産販売を行っている。

本校では科目畜産の教材として採卵鶏の飼育を行っている。浜名湖ファームの飼育管理方法及び独自の飼料調整、肥料生産を視察し、本校の教育に生かしたいと考え視察を行った。

2. 現地視察報告

令和2年12月23日に視察を行った。静岡県湖西市にある浜名湖ファームは周囲に田畑や林などに囲まれた静かな場所に位置していた。

まず、社長の近藤哲治さんにお話を伺った。以前は全国に鶉農家は30万軒存在していたが、現在は27軒になっている。浜名湖ファームでは約9万羽の鶉を飼育しており、1日当たり約6万個の卵を生産している。鶉の卵は約95%が水煮に加工されて、ほとんどが外食や給食などで消費されている。今年は新型コロナウイルスの流行により外食の自粛や小中学校が一斉休校になるなど、需要が大きく減少した。そのため、鶉の水煮工場も生産を中止するなど調整を行ったため、3割の減産を余儀なくされた。減産するために、本来ならばあと3～4か月の産卵を見込めるはずだった鶉を早めに処分することになってしまった。そんな中、浜名湖ファームのツイッターが話題となった。鶉の写真を見て、かわいい・気持ち悪いなどの声もあったが、27軒の鶉農家が日本全国の食卓を支えている事実を知り、「もっと食べたい」「がんばれ」などの応援する声も多数いただき、とても励まされたとのことであった。

続いて畜舎内を見学した。畜舎には、健康で元気な鶉を育てるためには新鮮な空気が欠かせないため、換気をよくした畜舎内は空調が効き、適度な温度と湿度が保たれていた。また、畜舎内の床に茶殻を撒いてあった。茶殻はペットボトルの緑茶を製造している会社と契約し、提供していただいているそうだ。消臭、抗菌、防塵などの効果が見込める。糞尿はベルトコンベアーで運ばれ、集めて肥料生産のために一時保管していた。また、丈夫で健康な体作りには良質な水が欠かせない。水はくみ上げた地下水に酵素を加えた「酵素水」を与えている。自由に飲水できるようニップルドリンカーが取り付けられている。柵のようなケージから顔を出す鶉はとても元気に動き回り、好奇心旺盛な性格に見えた。鳥類は警戒心も強く、臆病または攻撃的な種類も多いが、浜名湖ファームの鶉は外部から来た私に対しても決して

怖がることなく興味を持っているかのようなようだった。鶉を持たせていただくと「内臓が十分に発達しているから、体に丸みがあり、膨らんだ体型をしている」という近藤さんの言葉通り体が太く、丸みがありとても元気に動いた。

次に餌づくりの現場を見学した。餌は病気に負けない丈夫な体づくりの要である。餌はボカシといわれる発酵餌で、ふすま、米ぬか、野草酵素、黒酢、糖蜜など原材料とし 30℃に保温して発酵させる。発酵した餌を与えることで内臓や体が丈夫に育つとのことであった。餌作りの建物内には発酵餌の甘酸っぱい香りが広がっていた。

続いて肥料づくりの現場を見学した。鶉の糞尿を原料とし、硬く乾燥させた小粒のサラサラとした肥料であった。土によくなじみ、効きもよく、米や野菜がおいしく育つとのことであった。

最後に出荷調整室を見学した。選卵は手作業で行っており、室内は整理整頓されていた。割れた卵や模様のない白い卵を選別していた。模様のない卵は工場で加工する際、殻がうまく剥けないため、出荷しないとのことであった。



図1 鶉の餌箱とニップルドリンカー

3. 最後に

鶉の卵は「一羽の鶉が生まれるための全てが入った「命のカプセル」である。」という近藤さんの言葉が印象に残った。日常であまり意識しないことも多いが、私たちは動植物の命をいただいて生きているということを思い出させてくれる言葉であると感じた。資源や命は循環している。今回の視察では抗生物質や殺菌剤、ワクチンを使用しない鶉や環境にやさしい飼育方法の知識を得ることができた。また、農業を子どもたちに教える立場の人間として、命の尊さ・大切さを伝えていきたい。



図2 ケージから出した鶉



図3 鶉の糞尿を原料とした肥料